

## ◇近況・随筆◇

### I G Cでの交流

浅海重夫

昨年夏のI G Cの期間中に、外国からのお客さん数人と短いおつきあいをし、普段人づきあいの悪い自分としては過分の体験をすることができた。土壌地理の部会に集まった外国人は少数ながら1人づつ別の国からの研究者で、私には彼等がそれぞれの国の代表者であるような錯覚のもとに興味深く印象づけられた。人柄と国柄がうかがわれるいくつかの場面に接したが、何よりも気持の交流を果せたことが嬉しい。

中国から来たシー(席)さんは南京土壌研究所の大家だが、予想に反して尊大ぶったところのない気さくな親父さんという感じで、時に相手の顔をさぐるような眼をするが、疑い深い目ではなく心配そうな誠意をふくむまなざしだ。二・三度文通のあとの初対面が9月1日の開会式直前であったが、こちらが名のるといきなり私に抱きついて肩をたたき、すぐに何年来かの知己であるような思いをさせられてしまった。この春にプランのあった訪中旅行に加わって南京の研究所に彼を訪ねたいと思いつつ果せなかったので、来日してくれたことを感謝した。部会の特別講演として行われたソ連のグラスモフには質問にも立たず、講演中もソッポを向いているように見えたが、セスチュアなのか本心なのかその辺はわからない。

インドのデーさんは、会期の少し前に代理座長を依頼した人だった。9才の一人息子がいるというからまだ40才前と思われるが、座長ぶりは板についており、よくしゃべる。座長に支給する手当のことを予告しておいたが、会場で落合うや否やそれを催したり、なるべく安価で泊れるホテルを探してくれと注文したり、かなりがめつい感じがする。しかし西欧的なビジネスライクの習慣が身についた上に、チョッピリ途上国的一面ももち合わせた言動であろうか。会議への参加を決心するに当たって、日本は始めてであこがれの大国であり、日出づる国日本に行かれるのは光栄だと思ったそうだ。

ナイジェリアのリョウ(中国系)さんは最も若く元気のある青年で、部会のときのデーさんとの質疑応答の活発なやりとりが会場を魅了した。この人には、開会日の登録場でキャンセルの判明したソ連からの座長予定者のピンチヒッターを頼んだところ、快く(むしろ得意気に)承知して座長をつとめてくれた。彼は座長手当は要求しなかった。ナイジェリアはアフリカでは教育や所得の水準が比較的高い国と云われるが、彼自身はどうなのだろうか。会議で彼が隣席にいた時、例によって咳が出始めて困却したところ、彼はすぐにさりげなく私の背中をさすってくれた。そんな一面のある人だった。

ミールケはアメリカ人で、来日は始めてではない。口数は少いがアメリカらしく明るい気性で、初対面の相手として最も抵抗なく話せる中年の研究者だ。土壌部会では会期中の1日を日光周辺のエクスカージョンに当たったが、その時彼はその数日前すでに日光見物をすませていたといい、東照宮内の道順を案内者の我々日本人よりよく覚えていて、近道を案内したり説明を加えて皆を笑わせたり大へんひょうきんな人だった。会期最終日にサンシャインの展示会場で偶然彼を見かけたが、気軽にあ

いさつただけで歩き去って行く。どうやらそばにいた婦人が奥さんだったらしい。アメリカ人にしては意外にテレ屋なのかも知れない。

## フォルンドラン先生の訪日

式 正 英

西ドイツ、アウグスブルグ大学のゲルハルト・フォルンドラン教授は、43才、少壮気鋭の地形学者である。昨夏の来日の折、9月11日、お茶大の地理学教室にお招きして、職員、学生で講演を拝聴する機会をもった。「動態地形学的質量収支とドイツ地形学者の最近の動向」という演題について、ドイツなまりながら判り易い英語の、スライドをまじえてのお話しであった。興味深い内容のため正味二時間は瞬く間に経ってしまった。講演を開いた若い人達の胸に、国際的感覚を拓ききっかけを与えたとすれば、同教授も御満足のことであろう。

昨夏は国際地理学会議が東京で開かれたが、「国際集会への参加外国人学者の国立大学での講演会」を文部省が助成する事業があり、この制度を利用しての講演会であった。併し何故フォルンドラン先生をお呼びしたかについては、私に関係のあることでもあり、同先生のお人柄の紹介も含めて、その経緯を記しておくことにしたい。

もう9年ほど前になるが、1972年の3月から5月まで、私は西ドイツのミュンヘン大学地理学教室に客員研究員として滞在していた。その4月末にたまたまインスブルックから転任されて来たハンス・ホイベルガー教授は水河地形学者で、専門のうえで早速お近付きをいたゞけた。この方が一昨年、1979年11月に京大の堀江正治教授の招きで来日され、久し振りにお会いし旧交を暖めたものである。その時はこれが前振れになるとは思ってもみなかったが、その年の暮、フォルンドラン先生から急にお便りを載いた。「ホイベルガー氏から様子を聞いて、日本を是非訪ねたい。ドイツのファンドもおりたので、来年8月を中心に2ヶ月ほど滞在するつもりだ」と言うことであった。同先生はミュンヘン大学の主任教授ヴィルヘルム氏の秘蔵っ子で、当時若くして同大学のドツェント（専任講師）であり、教室のスタッフの中では、一番多く私をフィールドに案内して下さっていた。シンダーカールもツークシュピッツもそしてイラー川の流域も彼の案内で細かに歩くことが出来た。ドイツ人としては小柄だが、すばらしく澄んだ碧眼に栗色の髪、引き緊まった身体つきのゲルマンの典型的な美青年といってもおかしくない様なタイプであった。

その彼が来日されると言う知らせだけでも、胸のときめく様な懐かしさを感じ、早速、講演のお願いもすることにした。8月7日大学で再会して本当に嬉しかった。以前に比べれば皮膚のツヤをやゞ失った感じがしたが、はるかに年齢よりは若くみえ、実際ますますエネルギーに行動された。在日中のスケジュールの企画を練るお手伝いをさせて載いたが、「国際会議出席は目的ではなく、専ら山にこもりフィールドワークをしたい」と言われたのにはいさゞか驚きもし困惑もした。

著名な学者の中にも国際会議には無縁な方もいるので、驚くにはあたらなかも知れないが、時機だけに関係者は準備に大童で適当な案内者を探すことは極端にむづかしかった。それでも伊藤真人君